

開かれた大学のために

1. 教育を考える一言

「教育界は斜陽産業である！！」

2. 背景

これは大学時代ゼミでお世話になった先生の言葉です。当時は少子化が問題になることはなく景気も良かったものです。だから先生の言葉が引っかかったのです。しかしこの言葉の持つ意味は現代ではとても大きいです。子供の数は減り、経済は長く停滞したままです。将来教育界で生きていこうと考えている私にとって教育が廃れてしまうことはあってほしくないし、そうあるべきではないとも考えます。以下、この言葉に自分なりの解釈を加えながらこれから教育とはどうあるべきか自分の意見を述べてみたいと思います。

3. 考察

この言葉には二つのアイロニーが含まれていると思います。ひとつは教育が産業であるという点、もうひとつはそれが斜陽であるという点です。一人の学者として先生が教育を産業と捉えるとは考えにくいことです。これは大学が生徒の獲得競争、マーケティングといった面に重きを置きすぎて学問を学ぶ場としての大学は二の次になっている、という批判だったと思います。二つ目は、教育研究機関としての大学という存在について問うているように思います。自分の学生時代を振り返っても偉そうなことは言えませんが、日本の大学には卒業要件さえ満たしてしまえばさほど勉強しなくても卒業できてしまう所は多いです。学生が勉強をせずに卒業出来てしまうのであれば大学の存在理由の大きな柱を失ってしまいます。そこから斜陽という言葉が出てきたのではないのでしょうか。少子化、不況という社会状況だけでなく大学に対するソフト面ハード面における価値観の変化という点からこの言葉を捉えるとその意味は深いです。

最後にその解決法を考えてみたいと思います。私の考える解決法は大学を開かれた場にするということです。

私は生涯学習講座や国際交流のセミナーに出席していますが、そこに集まってくる人は年齢も国籍も様々です。しかし共通しているのは学ぶことに対する熱意と知識レベルがとても高いということです。自分としてもそういった人達との交流から学ぶことの意味、楽しさを教えてもらいました。今大学院にいる理由もそこから来ています。さらに言うと、そういった人達の多くは大学などで学ぶ意欲を持っているのです。

今まで述べてきた問題は年齢的にも人種的にも多様な人材を受け入れることで改善するでしょう。しかし、今の大学はこの点では閉鎖的と言わざるを得ません。

昨今、大学教育の改革が叫ばれ、大学にグローバルスタンダードを導入する動きがありますが、これも開かれた大学への一歩だと思います。アメリカのコミュニティーカレッジが格好の例となるでしょう。ここには年齢的にも人種的にも多様な人々が自由に学んでいます。国内で眠っている人的資源の活用という点から、大学の開放を考えてみようというのが私の意見です。

引用参考文献

佐藤一子 『生涯学習と社会参加—大人が学ぶことの意味』 東京大学出版会、1998年